



十二ひとえで京の式

結婚盛り上げます

京田辺市の同志社女子大生が、京都らしく、かつ地場産業や伝統文化の発展につながる結婚式の企画バック「源氏物語ウエディング」など2種類を作った。中京区で挙式などを取り扱う会社が窓口になって、販売を始めている。

(伊藤武)

同志社女子大生が企画

企画したのは、情報メディア学科の3年生16人。関口英里准教授の授業の一環として昨秋、2チームに分かれ、式場から料理、引き出物、当日の進行までを企画した。

でき上がったバックの一つが「源氏物語ウエディング」。08年の源氏物語千年紀をヒントに、府外の人に

も京都や源氏物語に関心を持ってもらおうと物語とゆかりの深い場所などを選んだ。

境内が紫式部邸跡にあたる嵐山寺(上京区)を挙式の会場にし、新婦は十二ひとえを着ることで、物語の誕生と新郎新婦の新しい生活の誕生を結びつける。新郎は東帯か直衣を着て、披露宴は円山公園(東山区)近くの料亭を使用する。引

き出物も物語をテーマにして京漬けものやお香などを用意した。

もう一つは「五感で感じる京都ブライダル」。日本庭園の中にある建物を使い、京都の伝統工芸品の京扇子を飾る。披露宴では伝統産業の組みひもを新郎新婦が結び、永遠のきずなを誓う。

関口准教授は「和の再発見ということ、格式のある日本文化の京都を選ぶ人が増えている。京都文化の本質を継承していくことが大事ではないか」と話す。十二ひとえを試着した河村美和子さん(20)は「十二ひとえは重たいが、一生の思い出として着たい」と話した。